

刊行 500 号までの軌跡とこれからの論文誌のあり方



情報・システムソサイエティ和文論文誌編集委員会

委員長 山名 早人

電子情報通信学会が発行する和文論文誌の生い立ちは、電子情報通信学会の前身である電子通信学会の会誌から1968年に分離・発行された「電子通信学会論文誌」にさかのぼる。そして、その4年後の1972年1月に和文論文誌Dが新設され、現在の情報・システムソサイエティ和文論文誌へと至る(図1)。

1972年の和文論文誌D新設当初は、全分冊共通の編集委員会体制であり、D分冊として独立委員会となったのは1985年5月からである。独立委員会は、情報・システム研究グループ論文委員会として設置され、初代の主査は大須賀節雄氏が務められた。当時の情報・システム研究グループでは、その改革の中心的なター

ゲットを、(1) 研究専門委員会の改革、(2) 論文誌の改革とし、(2) に関しては大須賀氏を中心に検討が進められた。改革の中心は、新しい研究分野の展望あるいは総括について、それぞれの分野の専門家に論文としてまとめてもらい、新分野で中心となる概念や考え方、更には今後の展開を会員の皆様に十分理解して頂くというものであった。こうした背景のもと、1985年から招待論文、1986年から解説論文の論文種別が加わるとともに、2000年からはサーベイ論文が加わっている。

その後、論文数は年々増加し、1989年1月には、論文数の年ごとの大幅な増加(ページ数に換算すると

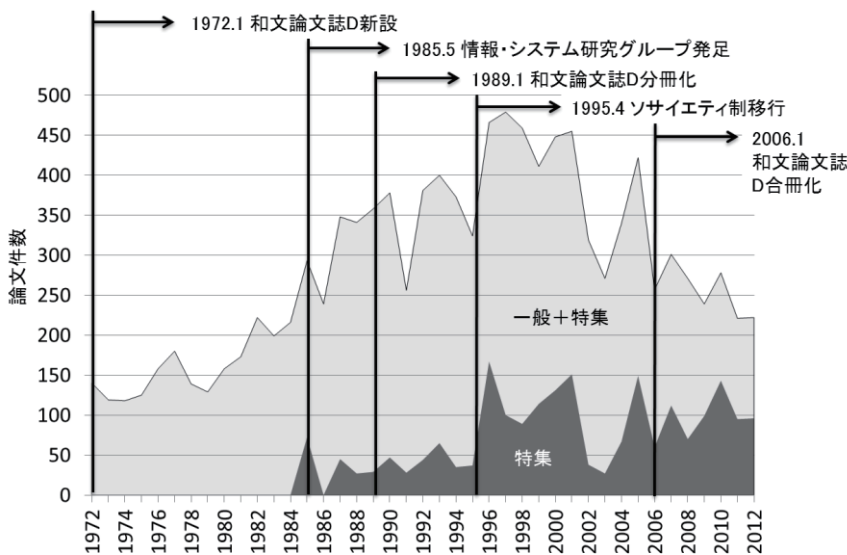


図1 年度別掲載論文数の推移と歴代の論文誌編集委員長

歴代の和文論文誌委員長(敬称略)

編集長(全分冊)	
1963.05~1968.06	小島 哲
1968.07~1972.08	喜安 善市
1972.08~1974.05	川上 正光
1974.06~1978.05	西巻 正郎
1978.05~1981.05	染谷 勲
1981.05~1984.03	中込 雪男
1984.04~1989.05	宇都宮 敏夫
独立委員会設置(D分冊・主査)	
1985.04~1987.05	大須賀 節雄
1987.05~1989.05	渡辺 貞一
1989.05~1990.05	坂内 正夫
D分冊・編集委員長	
1990.05~1992.05	木戸出 正継
1992.05~1994.05	末永 康仁
1994.05~1996.08	中嶋 正之
1996.05~1998.05	美濃 導彦
1998.05~2000.05	内藤 誠一郎
2000.05~2002.05	前田 賢一
2002.05~2004.05	牧野 正三
2004.05~2006.05	岩田 茂樹
2006.05~2008.05	井宮 淳
2008.05~2010.05	武田 一哉
2010.05~2012.05	杉本 晃宏
2012.05~	山名 早人

300ページ超)に伴う会員の経費負担増を抑えながらも会員の利便性の低下を最小にするため、D-I(コンピュータ)とD-II(情報処理)に分冊化された。その後、掲載論文数は1997年に479件とピークに達し、1998年以降は減少が続いている。これは、グローバル化に伴う国際論文誌、英文論文誌、国際会議への投稿が増えていることに加え、国内でも様々な論文誌が登場してきたことと無縁ではない。この間、1999年4月にはD-IとD-IIの分類が見直され、D-I(情報処理)、D-II(パターン処理)となっている。

2006年1月には、D-IとD-IIの分冊を廃止し、再び合冊となった。これは、2006年4月からのオンラインジャーナル配信開始に伴い、会員は所属するソサイエティの和英論文誌を閲覧できるようになることから分冊の意味が薄れることと、分類が難しい研究分野が発生していることが理由である。その後は、年間掲載論文数220～300件で推移している。

本論文誌の改革に目を向ければ、1985年の改革の柱であった招待論文、解説論文、そして2000年からのサーベイ論文の推進がある。これらの種別に分類される論文数は、1985年～2005年までは年平均5.2件となっており、1985年当時の改革が浸透していることが分かる。一方、近年は年平均3.4件となっており、招待論文、解説論文、サーベイ論文の件数が全体の掲載論文数の減少とともに減っている。これに対し、1995年4月のソサイエティ制への移行以降、本論文誌では特集を積極的に導入し、近年では全掲載論文数の4割以上を特集掲載論文が占めるに至っている。このように、特定の領域分野の技術・研究に時機を得た発表の場を提供する特集は、今や本論文誌における重要な柱となっている。そして、多くの特集について、その企画・運営は研究専門委員会の多大なる御協力のもとに実施されており、投稿から採否決定、掲載までを特集編集委員会のもとその役割を担って頂いている。

今後の和文論文誌のあり方については、会員の皆様各々に思いがあることと思うが、情報・システムソサイエティ、そして和文論文誌編集委員会では、会員の皆様に貢献できる論文誌であり続けることを念頭に、議論を積み重ねている。特に、情報・システムソサイエティは、システム開発に携わる多くの技術者に支え

られており、それら会員にとって有益なシステム開発論文の投稿を推進することを目指している。2001年6月に初めて、システム開発論文特集(委員長:D-I 馬場敬信氏、D-II 牧野正三氏)を企画した。その後も、2005年2月(委員長:天野英晴氏)、2010年10月(委員長:栄藤稔氏)、2013年10月(委員長:山田武士氏)と3～5年ごとに企画している。私自身、最初のシステム開発論文特集の編集委員として、馬場委員長のもとでお手伝いさせて頂き、その重要性を肌で感じている。

更に、次世代の情報・システムソサイエティを率いる若手研究者を育成することを目指し、学生論文特集を2012年3月(委員長:筆者)、2013年3月(委員長:杉本晃宏氏)、2014年3月(委員長:峯松信明氏)と2012年より毎年企画している。本特集も好評を得ており、毎回100編を超える論文投稿を頂いている。特に学生論文特集では、論文の執筆・修正を通じて、若手研究者の方々が、問題の本質を捉え、自らのアイデアを整理・検証し、その核心を必要十分に説明する能力を涵養することを目指しているため、より丁寧な査読を心がけている。

今後も、会員の皆様へのメリットを第一に考え、サーベイ論文、解説論文の充実を積極的に進めていくとともに、新たな試みとして、投稿から採択・公開までの期間を短縮するために、論文の早期公開(採択と同時の公開)の実現を進めていく所存である。しかし、この先もより良い論文誌であり続けるためには、時代のニーズに即した改革を欠くことはできない。そのため、情報・システムソサイエティ、そして和文論文誌編集委員会のメンバだけでなく、会員の皆様からの意見が大変重要である。御提案は大歓迎であり、ぜひ編集委員会までお寄せ頂きたい。

山名 卓人(正員:シニア会員) 昭62早大・理工・通信卒。平元同大学院修士課程了。平5同大学院博士後期課程了。博士(工学)。平5～12電子技術総合研究所。平12早大・理工学部助教授。平17理工学術院教授。現在に至る。本会東京支部評議員(平17～18)。本会和文論文誌A/Dの編集委員を経て和文論文誌D編集委員会副委員長(平22)。同編集委員長(平24～)。情報検索、大規模情報解析、並列・分散処理等の研究に従事。